

"学ぶ"に寄り添う
コミュニケーションマガジン

社内報アワード
受賞

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
288
Mar. 2024

特集

ことばと生きる 聖学院の実践例

巻頭座談会

女子聖学院中高と
聖学院中高の
国語科教員による
トークセッション

各校・各園卒業生インタビュー

歩む人たち

聖学院大学卒業生 東 清志さん

関係団体の皆さんにインタビュー

支える人たち

戸田ビルパートナーズ株式会社 石川 恵架さん



140th Anniversary of the
Disciples' mission to Japan

ことばと生きる 聖学院の実践例

聖学院では日々「ことば」を大切にした教育活動を行い、成長の促進や感性の育成に取り組んでいます。日本の多国籍化が進み、日本の学校で日本語の授業を受ける外国人は増加、またスマートフォン等の普及により、コミュニケーションの在り方にも変化が生じています。日本語で、日本の文字で、自分のことを発信し誰かのことを理解する。今このことがより一層重要になっているのではないのでしょうか。今号はコミュニケーションの土台とも言える「ことば」について、聖学院ではどのような教育を実践しているのか、様々な角度から考察していきたいと思います。

CONTENTS

- 特集
- 01_ **ことばと生きる 聖学院の実践例**
女子聖学院中高と聖学院中高の
国語科教員によるトークセッション
- 03_ **&Talk**
ことばと生きる 聖学院の実践例
- 07_ **focus**
- 07_ アカデミックジャパニーズ
[聖学院大学]
- 08_ 国語教育
[聖学院中学校・高等学校]
- 09_ 論理国語
[女子聖学院中学校・高等学校]
- 10_ 感性を培う「作家の時間」
[聖学院小学校]
- 各校・各園卒業生インタビュー
- 11_ **歩む人たち** [東 清志さん]
- 関係団体の皆さんにインタビュー
- 12_ **支える人たち** [石川 恵架さん]
- 13_ Seig NEWS
- 16_ 読者の声
- 17_ 2023年、学校法人聖学院は創立120周年
- 18_ 聖学院の歴史(年表)
- 120年の轍を歩む
聖学院歴史探訪
聖学院教育の歴史
—聖学院の創設と発展 女子聖学院 4—
[EPISODE #24]
- 19_

聖学院ニュースレターアンケート

QRコードから本誌の感想をお寄せください。アンケートに回答いただいた方の中から抽選で10名様に「聖学院120周年記念オリジナルコースター」をプレゼント！ いただいたご意見は、編集の上、本誌にてご紹介させていただくことがあります。



- 有効回答期間
2024年3月27日～2024年5月19日
- 当選発表
当選者にはメールにてお知らせします。



本アンケートに関するお問い合わせ
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530



ちくだ しゅういち
筑田 周一

女子聖学院中学校・高等学校国語科教諭。啓明学園中学校高等学校教諭を経て現職。前全国教室ディベート連盟常任理事。女子聖学院では1994年から国語の授業にディベートを取り入れ、現行の中3の3学期に実施する道筋作りを担った。演劇部、ディベート部顧問。



あんどう のぞみ
安藤 希

聖学院中学校・高等学校国語科教諭。現在中学1年担任。国語科という教科(切り口)で何を教えるのか、生徒は何を学びどのような力を身につけるのかを日夜考えながら授業を行っている。

国語が明治維新後の教育制度によって成り立ったことを考えると、国語の創成期の目的は識字率向上だったと思われる。読み書きができるようになることで、文字を使った表現のスキルや、誰かが書いた文章の読み取り方を学ぶことも可能となりました。言語教育では、口頭でのコミュニケーション「聞く」「話す」に、文字でのコミュニケーション「読む」「書く」を加えて4技能と呼びます。この4技能とそれを用いた表現と読解が国語教育の基本です。国語という文学作品(古文、漢文含む)や作文という印象を持つ方も多いのではないのでしょうか？一方で、本当に国語はそれだけを学ぶ教科なのでしょうか？国語という教科の本質について理解を深めるため、女子聖学院中学校・高等学校(以下女子聖学院中高)の筑田周一先生と聖学院中学校・高等学校(以下聖学院中高)の安藤希先生に、聖学院の国語科教育についてお話をうかがいました。筑田先生は演劇部とディベート部の顧問をされており、安藤先生はヒブリオバトル(詳細後述)を授業に取り入れていらっしゃいます。

現代の国語は理解する力と表現する力を重視

「国語の変遷を教えてください。」
筑田 最初は国民の識字率向上という目的があったと思います。ただそれだけということはありません。国語はそもそも現代文の他に古文、漢文、3つの分野を扱う科目です。また戦前の国語の教科書には理科や社会の要素も入っていました。全体的な教養を養う教育の中心のな科目だったようです。戦後、理科や社会は独自の科目になりましたが、他教科を学ぶ上での基礎科目であることは変わりません。2020年度以降に改訂・実施された学習指導要領では、国語科の目指す力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と定め、その実現のために「学びに向かう力・人間性の育成」「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」が教科として重視されるようになりました。

自分の意思を発信する女子聖学院中高、クリティカルシンキングを重視する聖学院中高

「各校の国語科の特徴について教えてください。」
筑田 学校法人聖学院はキリスト教主義の学校で、聖書に基づく人格形成を行っています。聖書の中に「初めに言葉があった」と記載されていて、やはり言葉は神様からもたらされたものですから、その言葉というものに対して感性を磨いていく、もしくは大切に使うということ。どの教員もその点を重視して授業を行っていると思います。

加えて女子聖学院中高には「Be a Messenger」という教育目標があり、自分の意思を発信していくことを重視しています。それは学校文化としても根づいていて、合唱コンクールや運動会においてリーダーの生徒が仲間全員に手紙を書いて送ることがあります。何かにつけて自分の思いを発信していくということが定着しています。国語科においてもそれは同じです。そして発信するためにはやはりその前段階としてインプットが必要です。アウトプットを意識させることで生徒はインプットに目を向けます。例えば、どうしたらもっと的確に話すことができるのだろうかと考えることが、読書や辞書引き、友達とディスカッションすることなどにつながります。結果、4技能を満遍なく学べるのではないかと考えています。

また、国語という感性とわれわれちなのですが、非常に論理的な教科です。そのことを生徒に理解してもらうため「読む、書く、聞く、話す」それに「考える」という思考を加味して授業を展開しています。

安藤 聖学院中高には「StudentからTeacherへ」(教えられる存在から主体的に学ぶ存在へ)という教育コンセプトがあり、国語科にも根底にはその考え方があります。学習の中に生徒の興味関心があれば生徒は自ら学ぶ、教員は興味関心の仕掛けを作るといった考え方があります。



&Talk

特集 ことばと生きる 聖学院の実践例

「読む、書く、聞く、話す」の4技能に加え、それらを活用した考える力と表現力、さらにクリティカルシンキングに論理的思考…。聖学院の国語科には様々なキーワードがありました。



クリティカルシンキング、論理性、ディベート、ピブリオバトルなどについて語る筑田先生と安藤先生



ディベート甲子園（全国大会）の様子。写真は女子聖学院中高が全国大会の会場として使われ、準優勝した時の物。

筑田 ピブリオバトルは女子聖学院中高でも取り入れています。ディベートもそうですが、型があるというのは良いことだと思います。自由に話しなさいと言われると結構困ります。まずはピブリオバトルの型通りにやることで話し方が分かります。次にそこから自分らしさを出していく。制限があるからこそ、その制限の中で創意工夫という自由を得ます。

同じように読み方の型、書き方の型、聞き方の型などいろいろな型があります。例えば読み方の型でいうと、中一の教材「少年の日の思い出」を読むにあたって「最初に少年という言葉が出てくるよね？少年は子どもだよ。子どもが出てくる話は成長の物語の確率が高いんだよ。成長の物語というのは子どもが壁にぶつかって、それを乗り越えようとする話か、現実の厳しさを突きつけられる話かどちらかだよ」と読み解き方を教えることができます。その型を用いて今度は「トロッコ」を読むことができず。また、一つの型を知っていると、その型から外れた別の教材を読んだときに、その型からどのくらい外れているのか生徒は気づけるようになります。そこに作家の工夫があることも見えてきます。それが生徒の読解力につながっていくと考えています。

国語における論理性

先ほど国語は論理的な教科という... 国語科自体としては、社会で当然と... 批判的思考を重視する傾向があります。中学1・2年生の国語を現代文とクリティカルシンキングに分けて... 4技能にとどまらない広がりを感じます。

教え方に余白がある国語科

両校の特徴をうかがうと、国語には... 他教科は教科書に教材と教えるべき内容が掲載されています。しかし国語は物語文と説明文、つまり教材の方しか載っていません。そのため何を軸に授業を展開するかは教員に委ねられているところが大きいのです。



お話をありがとうございました。もう少し詳しく聞かせてください。筑田 論理的思考が無かったら文章は書けません。感性で書くのは無理だと思えます。文章は全体の構成はもちろん、主語述語が対応しているというようなミニマムなどから正確な論理性が必要になってきます。それを踏まえた上で比喻などが使えるようになり、表現の幅が広がっていきます。



聖学院中高のピブリオバトルの様子。写真は高校の授業でのピブリオバトル決勝。

安藤 論理性が無かったら文章が成り立たないというのは本当にその通りだと思います。物語文に関しても論理性はあります。ところが一般的には、文学作品のよつな物語文には論理性が無いと思われていることも多いように思います。物語文は描かれている場面があり、その奥底に書きたいテーマや思想が存在します。そういう構造自体、論理性が無いと成立しません。書くことにとどまらず、読み取ることにしても話すことに関しても構成を意識することが大事です。

安藤 他教科は教科書に教材と教えるべき内容が掲載されています。しかし国語は物語文と説明文、つまり教材の方しか載っていません。そのため何を軸に授業を展開するかは教員に委ねられているところが大きいのです。私自身、国語は何を教える教科なのだろうと大学院までずっと悩み続けてきました。今では、国語は捉え方の幅が広いからこそ、自分で論文や実践報告を読むなど試行錯誤して授業を作っていくものなのかなと思っています。筑田 そうですね。実は国語の教員が10人いれば、授業も十人十色です。言い換えれば教員ごとに様々な学びがあるとも言えます。だから生徒には中高6年間の中で、極力異なった教員の授業を受けて視野を広げてほしいと思っています。

型通りにやることで表現の仕方を理解し、その型の中で創意工夫が生まれる。筑田先生はディベート部の顧問を務められています。ディベートとはどのようなものですか？筑田 賛否が大きく割れるようなテーマについて賛成か反対の立場で議論し、審判が勝敗をジャッジします。自分の意見は置いておいて肯定側にも否定側にも立ちます。つまり物事の両面をメリット、デメリットという観点で検証していくこととなります。お互いを尊重することにつながりますし、自分の視野や価値観も広がります。



また先ほど安藤先生がおっしゃっていたクリティカルシンキングはディベートにも通じる話です。ディベートでは「みんなが言っているから正しい」というように思考停止することは許されません。例えば自分の主張を「憲法で禁止されている」と憲法を根拠にした場合、「それなら憲法を変えます」と言われたら根拠があっさり崩れてしまいます。出てから求められるのは、筋道の通った文章を一定量書く力です。高校卒業までに生徒たちが、ある程度身に付けてくれたら良いなと思っています。卒業後の再会の言葉で生徒の成長が分かる(筑田) 試行錯誤して自分の感情に当てはまる言葉を探してほしい(安藤)



島立先生の中3「国語」の授業

ワクワクする〴〵問い〴〵への
取り組みで言葉を「啓く」

国語教育

私が担当する学年のドライビングクエストは「ともに好きを啓くには？」で、これは先生たちみんなが考えました。〴〵は「できなかったことができるようになる」、「持つていなかったものを得る」、「あるいは「暗いところに灯を点す」というニュアンスの言葉です。そして、言葉は例えるならば眼鏡のレンズのようなものであり、見えないものを見えるようにすることが出来ます。「言葉を啓く」ことによって、語彙が増える、文法を理解する、文章が書けるようになる、論理的に考えることができるなど、できることが増えるわけです。

何かを〴〵考える。ためには論理だけでは不足であり、その前提となる知識や、文化とも言い換えることができる国や地域の共有の価値観なども理解しておく必要があります。そうした意味で「読む」「聞く」というインプットはとても大切です。そして「書く」「話す」というアウトプットに向かうわけですが、そこで重要なことは答えを出すことに焦点を当てるのではなくて、〴〵を〴〵を設定して、〴〵に〴〵向き合っていること、考えた時間がそが大事なのだということです。

そして、私たち教員は、いかに生徒たちがワクワクして、〴〵に取り組



小説を書いて、
視点を変えて考えることを学ぶ

中2では太宰治の「走れメロス」が授業の題材になります。小説はメロスの視点から書かれています。授業では親友のセリヌンティウスの視点によって生徒に小説を書いてもらいます。これは視点を変えて考えることを学ぶためですが、小説を書くことは語彙を増やすためにも効果があります。



アカデミックジャパニーズの授業風景

日本語だけではなく、
日本を学ぶための知識を身に付ける

アカデミックジャパニーズ

聖学院大学は世界との交流を重視し、留学生を数多く受け入れています。かつて留学生というと自国の大学を卒業していたり日本で働いた経験があったり、日本の大学で学ぶための素地を持つている人がほとんどでした。しかし、今聖学院に通う留学生の多くは、日本語学校を卒業してすぐに入学した、日本人学生と同年代の学生です。そのため、日本語は話せても、日本の社会に対する知識が充分ではないことがあります。入学時点で日本の社会保障制度や都市問題、日本国憲法の三大原則などについて日本語で説明できる留学生はなかなかいません。一方、大学の講義ではこれらの知識が身に付いていることを前提として授業が進められます。

このギャップを補うために2017年から取り入れられたのが「アカデミックジャパニーズ」という授業です。この授業の特徴は、教養科目「日本社会」と連動しているところです。「日本社会」は、社会科学を専門とし、長らく中学校で教鞭を執っていた教員が、「公民」を素材に、発展的な内容で講義をします。ここで、留学生は日常会話とは異なる日本語で日本のことを学ぶ経験を行います。「アカデミックジャパニーズ」は、「日本社会」における日本語の部分を支援する授業です。この二つを併せて受講することで、基礎知識だけでなく、大学の講義で使われる日本語も習得できます。

かつての日本留学は自分の国に帰って学んだことを活かすのが目的でし

ラーニングセンターとの連携

聖学院大学には様々な学習の相談に応じるラーニングセンターという窓口があります。ここでは日本語の添削してくれるなど、心強いサポートが受けられます。しかし利用したことがないと、心理的ハードルが高く、なかなかセンターまで足が向かいません。アカデミックジャパニーズでは、日本社会のレポート執筆時に、ラーニングセンターの利用を促しています。一度でも利用していれば、必要なときに行きやすくなるからです。



た。今日日本には多くの外国人が住み、多国籍化が進んでいます。留学生の中には、日本での就職や自国コミュニティへの貢献を目指す人も少なくありません。

「留学生は今後日本を支える構成員の一人になっていくと思います。アナウンサーのような完璧な日本語を目指すことよりも、学びたいことを学び、スキルを身に付けることの方が、彼らにとっても社会にとっても有意義なことだと思います。この授業ではそのことに重点を置いていきます。」と語るのは、アカデミックジャパニーズに立ち上げから関わっている黒崎佐仁子先生（聖学院大学准教授）。また黒崎先生はこの授業で試行錯誤の経験を積んでほしいとも言います。「言葉の意味は文脈で変わります。辞書で調べた意味が全てとは限りません。意味が分からないとき、どう対処すれば良いのかを身に付けてほしいと思っています。」

留学生教育の現場では、日本語だけではなく人としての成長も促す言語教育が行われていました。

現在、中3では森鷗外の『高瀬舟』を題材に授業を行っています。弟を殺した罪で島に流される舟での物語ですが、主人公である兄は罪を犯しているにも関わらず清々しい様子で描かれています。小説の序盤しか読んでいないところで、「兄はなぜそうなのか」など、疑問に思うこと、違和感を感じることを言語化して、それについて推理してもらいます。そうすると物語は自分ゴト化していきます。違和感の言語化では、そこに生徒の人間性や価値観も顕れてきます。授業では生徒たちの価値観を評価するのではなく、思考の論理性に焦点を当てます。そしてそれは、次のティベートの授業へとつながっていきます。



お友だちの作品を読むことも大切な作家活動のひとつです。

一人ひとりが表現する楽しさを知る
— 学びの原点 —

感性を培う「作家の時間」

聖学院小学校では国語教育に力を入れており、特に「ことば」による表現教育をこのほか大切にしてきました。

聖学院小学校はことばや文字を使って自分の伝えたいことを表現できる力を育てるために、国語の中で「表現」という授業を行っています。その授業は「作家の時間」と呼ばれ、子どもたち自身が作家となり、自由なテーマで自由に書くことができるという時間です。この「作家の時間」は1980年代から欧米で広がり始めた授業法で、アメリカでは「ライティング・ワークショップ」と呼ばれています。聖学院小学校では1年生から6年生まですべての学年で「作家の時間」に取り組んでいます。

「作家の時間」は授業の冒頭10分ほどを使い、「ミニレッスン」を行います。作品を書くための大切な技術などを学びます。その後は自由に書く時間が始まります。この時間は、子どもたちは先生からの教えを受けることなく、自由に書くことができます。何を題材にしても、どれだけ書いても、認めてもらえます。

「作家の時間」は、子どもたちの主体性にまかせる活動です。書くことを直接指導しているわけではないので、「書くスキル」が劇的に向上するわけではありません。しかしこの活動を続けていくことで、日常の中で使われる「ことば」に敏感になったり、日本語に備わっている美しい表現に気付いたりしながら、語彙を広げ、表現力

が豊かになっていきます。こうした、緩やかな成長を見守る活動なのです」と教頭の田村一秋先生は語ります。

自由に書く時間を終えると、書いた作品を読んでもらう人を選びます。その児童は「作家さん」として作品を朗読します。それを聴いた児童たちは「作家さん」にファンレターを書きます。ファンレターは付箋を使い、褒める視点で具体的に書き、「作家さん」に伝えます。

この手法は、日本ではまだ認知度が高いわけではありませんが、聖学院小学校では非常に手応えを感じている手法であるため、積極的に取り入れ、実践しています。子どもたちは、「作家の時間」を通して表現することの楽しさを体験できます。自分の書きたいことを自由に表現できることで充実感を得られ、自己肯定感も高まります。ファンレターを書くことで褒める文化も生まれ、お互いに認め合えるようになります。他者を尊重し、良さを具体的に伝えることでお互いに気持ちよく成長し合えるのです。

子どもたちは、表現することの楽しさを知ること、学びの楽しさを知ります。このことは、どの教科を学ぶ上でも、とても大切な事柄で、学びの原点と言えます。聖学院小学校では6年間をかけて、子どもたち一人ひとりの「書きたい思い」を尊重しながら、感性を大切に育てています。



田村一秋教頭先生



菅先生の高2「論理国語」の授業

論理国語

語るべき「ことば」とは
何であるのかを探る学びの時間

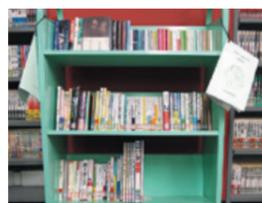
菅の香先生は高校2年生の「論理国語」の授業を担当しています。高校2年生は、中1〜高1の間「聞く・話す」「演劇ワークショップ」「ディベート」「ヒブリアバトル」といったコミュニケーション技術を高める授業に取り組んできました。女子聖学院が教育目標として掲げる「Reasonable」語ることはもつ人を育てます」の「メッセンジャー」としての素養を育ててきたと言えます。他者の意見を受け止めること、安心して自分の意見を伝えることができます。そして、次の段階となる高2の「論理国語」では、語るべきこととは何であるのかを探っていきます。それは、「世界で起きている様々なできごとと自分自身とのつながりを見出し、建設的な意見を持つこと」と菅先生は言います。

授業で扱う題材は、各自の判断で先生が教科書から選びますが、菅先生は生徒たちのこれまでの常識や価値観を揺さぶるような、意外性のある、そして少し難しい文章を選ぶことにしているのだと言います。生徒たちの手持ちの常識だけでは太刀打ちできない文章に向き合うことが新しい視点を得ることになり、そして何より真剣に学ぶ姿勢につながるからです。

授業のテーマは、定期テストのタームごとに設定しています。例えば2学期の中間試験までの期間は、「近代化と共同体の崩壊」をテーマにして菅先

おすすめの1冊『地球にちりばめられて』

菅先生の生徒へのおすすめの小説は、多和田葉子さんの小説『地球にちりばめられて』(2021, 講談社文庫)。母語とは一体何だろうと考えさせられる小説です。女子聖学院図書館が発行する「あなたへの贈り物-推薦図書目録-」にも菅先生の紹介文が掲載されています。



女子聖図書館には推薦図書コーナーがあります

生が選んだ「市民社会化する家族」(今村仁司)と「真理の探求と民主主義」(河野哲也)という2つの評論文と、カフカの小説「変身」を題材としました。一見無関係に見える3つの文章に共通するのは近代化によって生じた核家族化、個人主義の進捗と、それに伴う課題です。虫になってしまった主人公ガムザの面倒を見たのは、家族の中で妹だけでした。その姿から、ヤングケアラを連想した生徒がいましました。他には、「山月記」では主人公は虎になるが、「変身」ではなぜ虫なのか、虫は何を象徴しているのか」という、問いを持つ生徒もいました。

菅先生の「論理国語」の授業は、生徒が情報をインプットしたときに自分の中で受け止める場所を作る時間なのだと言います。

歩む人たち

「卒業生を尋ねて」

18

聖学院大学卒業
あずま きよし
東清志 さん

PROFILE

2005年聖学院大学人文学部日本文化学科入学、2009年卒業。2009年三育学院カレッジ神学科入学、2012年卒業。広島三育学院高等学校、SDA京都キリスト教会、SDA都城キリスト教会、広島三育学院高等学校チャプレン、SDA光風台キリスト教会牧師、光風台三育小学校チャプレン、SDA天沼教会副牧師を経て2023年4月より東京衛生アドベンチスト病院チャプレン赴任。



リトリートという言葉には「退却する」という意味があり、日常生活を離れた場所で学生と教職員が語り合う行事です。東さんは大学2年生の時に実行委員長を務めました。

病院チャプレンとして働くことを通して、ミッションスクールの存在の大きさを知りました

「病院チャプレン^(※1)としての大切な使命の一つに、患者さんの魂のケアがあります。1日に8〜10人ほどを訪ねてお話をうかがいますが、患者さんの中にはミッションスクールを卒業された方もいて、聖書の言葉に感動されることも。改めて、ミッションスクールの大切さを実感しています。」2005年4月に聖学院大学人文学部日本文化学科に入学された東清志さんは、神学校卒業後にいくつかの教会で牧師を務め、2023年4月より東京衛生アドベンチスト病院（東京都杉並区）にチャプレンとして赴任しました。病院での勤めでは患者さんへのケア、働く人へのケア、病院の理念を守ることの3つを大切にしています。医師や看護師が医療的ケアで多忙な中、自分の思いを言葉にできない患者さんにも、と東さんは言います。その言葉を一緒に拾い上げながら、時には聖書の言葉を読み、共に祈ることもあるそうです。

東さんは学生時代、日本語教師を目指して学んでいました。聖学院大学SCF^(※2)にも所属し、クリスチャンとして喜びに満たされた先輩や同級生との印象的な出会いもありました。そんな在学中のある時、人文学部チャプレン（当時）の菊地順先生より真剣な眼差しで「将来は牧師になりませんか」と問われます。当初は「こんな自分にできるだろうか」という葛藤がありました。しかし、使命が与えられているか確かめるため神学校に進みました。牧師として仕える中では人間関係の難しさに直面することもありましたが、自分の力を超えて神様が働いてくださり、人と人とのこだわりが溶かされていく場面を目撃することがありました。何気なく語った聖書の言葉を深く心にとどめてくれる方もいて、言葉の使い方という点において大学時代に学んだ日本語教育が一助となっているそうです。

将来の展望は、短期的には1人でも多くの患者さんと出会っていくこと、長期的には臨床心理士といった専門的な学びを通して成長し、より深く仕えていきたいと語ってくれました。

※1 チャプレン…病院や学校で働く牧師（聖職者）のこと ※2 SCF…聖学院大学クリスチャン・フェローシップ（学生団体）



支える人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに
聖学院への想いをうかがってみました。

No.
10

戸田ビルパートナーズ株式会社
いしかわ あやか
石川 恵架 さん

2022年、戸田ビルパートナーズ株式会社入社。ビル管理事業部業務部に配属され、入社当時から聖学院駒込キャンパスの3校1園の設備管理に携わり、2023年10月より担当を務める。自身もプロテスタントの女子中高出身。



駒込キャンパスの
設備を管理してくれている
縁の下の力持ち

安全で快適な環境を維持することで 間接的に学びを支えていきたい

学校内の水道や空調、防災設備。いつも使えて当たり前ですが、それを人知れず管理している人たちがいます。聖学院小学校・幼稚園と女子聖学院中高、聖学院中高の駒込キャンパスのインフラを管理しているのは戸田ビルパートナーズ（株）です。ビル管理事業部業務部の石川恵架さんに聖学院でのお仕事の内容をうかがいました。

「戸田ビルパートナーズ（株）は、主に戸田建設（株）が施工した建物の設備管理、清掃、警備などを行っている会社です。聖学院では設備管理を担当しています。私はその中で設備管理全体をまとめる業務をしています。定期的な点検を行ったり、設備の不具合や故障が発生したときに現場に駆けつけ修理を手配しています。点検業務には水質検査、空気環境測定（CO₂濃度、CO濃度、粉塵、揮発性物質の有無等）、害虫駆除、排水槽、貯水槽の清掃、消防設備の点検などがあります。設備の保守に関しては、極力故障する前に対応する管理を心掛けています。それでも機械なので不測の事態もあります。もし故障したら、授業に支障がないよう、スピード感をもってすぐに

対応するようにしています。

私たちの仕事は裏方の業務なので、姿が見られる時はトラブルが起きている時です。そのため、児童、生徒をはじめ、学校の方々の接点はほとんどありません。その分、感謝の言葉をいただいた時はとてもうれしいです。先日、聖学院中高の入試の臨時警備を手配できないかと相談をもらいました。イレギュラーなご要望だったので、無事手配することができ、事務職員（塩川さん）に「すごく助かった」と仰っていただきました。私のやりがいにつながっています。これからも縁の下の力持ちとして、誰にも気づかれない状態を維持していきたいと思っています。」

聖学院中高で空調トラブルがあった時、すぐに石川さんが現地確認に来て、迅速に修理手配してくれました。そのおかげで大きな混乱もなく教育環境が維持されました。他にも聖学院各校から、戸田ビルパートナーズ（株）と石川さんへの感謝の声が上がっています。人知れず、されど石川さんたちの仕事ぶりや誠意は、聖学院にしっかりと伝わっています。





英語プレゼンテーションコンテスト
東京ブロックで銀賞受賞
全国大会への出場が決定しました

(一社) 英語4技能・探究学習推進協会が主催する、第6回Change Maker Awards (CMA) のチーム部門に女子聖学院中高「ecomameぶっち」の高11生、3名がエントリーをし、東京ブロックで銀賞を受賞し見事、全国大会へのキップを獲得しました。CMAは自分(たち)が現在、夢中になっている「探究」について英語でプレゼンテーションをするコンテストで、全国大会は3月24日(日)、東京国際交流館 プラザ平成にて開催されます。



ecomameのフードバンク活動



聖学院創立120周年特別授業
「はじめてのロゴデザイン」
～4年生～

1月19日(金)、4年生を対象に「ロゴ」について学ぶ特別授業が行われました。聖学院創立120周年の記念ロゴを制作した会社の方々が先生となり、ロゴの持つ役割や、ロゴは思いや願いが具現化されていることなどを学びました。学びの後は自分だけのオリジナルロゴを作る時間です。自分の名前や好きなものなどからそれぞれにイメージし、思い思いにデザインしました。なかなかペンが進まなかった児童も、先生からの具体的なアドバイスをもらって、熱心にペンを走らせていました。最後は自らデザインしたロゴを缶バッジにして完成です。子どもたちは互いに缶バッジを見せ合い、笑顔があふれるひとときとなりました。ロゴの制作を通して新しい自己表現を学ぶ貴重な体験となりました。



まだまだあります!

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。



共生社会の創造について発信
2023年度心理福祉学研究会を開催

2月17日(土)、心理福祉学研究会「共生社会の創造:心理福祉学からのアプローチ」が開催されました。第1部は教員や院生、実習指導者による研究発表が、第2部はシンポジウム「孤独孤立からの脱却のために」が実施されました。なお、シンポジウムでは大橋良枝氏(本学心理福祉学部教授・公認心理師・臨床心理士)、古谷野巨氏(本学心理福祉学部特任教授)、川田虎男氏(本学心理福祉学部非常勤講師・社会福祉士)の発表がありました。

学生や卒業生、福祉の現場で働く人も参加し、人にやさしい地域づくりのためにできることは何か、心理福祉の立場から語り合う機会となりました。



リトリート4年ぶりの対面開催
テーマ「自分らしく生きるためには」

2月8日(木)～9日(金)にかけて、ホテルヘリテージ(埼玉県熊谷市)を会場に4年ぶりとなる対面でのリトリートが開催され、学生と教職員合わせて39名が参加しました。リトリートには「退却」という意味があり、聖学院大学では女子聖学院短期大学時代から、日常を離れて学生と教職員が一つのテーマについて語り合う時を大切にしてきました。今年は「自分らしく生きるためには」をテーマに、礼拝や主題講演からヒントを得て各グループで語り合い、自身の生き方について振り返る時となりました。



大盛況!
GIC Project Week 最終発表会開催

聖学院中高、高校グローバルイノベーションクラス(GIC)は、独自科目「Project」「STEAM」の成果を報告する『GIC Project Week最終発表会』を2月24日(土)、SHIBUYA QWSにて開催しました。当日は、保護者、学校関係者、卒業生など、たいへん多くの皆様にご来場いただきました。ピッチプレゼン、ポスターセッションの他、親子カルタやマイクロプラスチックゴミでアクセサリを作るワークショップなどが実施され好評でした。また、起業・国際ゼミの生徒が商品開発した滝野川人參ドレッシング、担々ソースも会場で販売されました。



※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

皆様にお寄せいただいたご意見を紹介します！

読者の声

本誌では毎号、P.01目次下にて読者の皆様にアンケートをお願いしております。そのアンケートにお答えいただいたご意見の中から反響が大きかったものを、編集の上、いくつかご紹介させていただきます。アンケートにご協力くださった皆様、貴重なご意見を誠にありがとうございました。



様々な皆様の声

社会福祉法人との連携・交流で、自分と同じ生徒という立場でありながら、自分には輝けない場所で活躍している生徒に胸が熱くなりました。

●聖学院中高／在校生

村治さんの言葉によって女子聖の良き環境を家族で再認識することで、家族の会話も広がり、大変貴重な機会となりました。

●聖学院中高／卒業生

聖学院のミッションとその変遷を心に留め直しました。原点に立ち返れたように感じます。

●聖学院みどり幼稚園・聖学院小学校・聖学院中高／卒業生

我が子が通うみどり幼稚園の設立背景や根底にある教育観をうかがうことができてよかったです。

●聖学院みどり幼稚園／保護者

在学時から尊敬していた小倉先生の対談を興味深く読みました。卒業生であることを誇りに思えて、うれしい気持ちになります。

●女子聖学院中高／卒業生

聖学院の歴史の特集は非常に興味深く読みました。鎖国が終わり近代化を急ぐ日本で伝道から教育を始めた背景が非常に面白く感じました。日露戦争で日本が疲弊していた時代に、キリスト教が人々に希望や教育を与える一つのきっかけとなり、その流れの中で社会的に困窮した人や労働者に寄り添うように聖学院の創立があったという歴史に、とても誇らしい気持ちになりました。

●聖学院小学校／保護者

聖学院のルーツを知ることができ、その足跡を実際に辿ることができるマップも示されていたので、大変興味を持ちました。

●聖学院大学／教職員

皆様の声を届けました！ 特に反響の大きかった記事に アンコールインタビュー！

— Encore Interview —

NEWS NETTER No.286
「歴史探訪プロジェクト」発祥の地を訪ねて



女子聖学院高校
宗教委員長
M.G.さん

私たちの活動に興味を持っていただきありがとうございます。

記事を振り返り、改めて聖学院の軌跡を思い起こしました。法人120周年記念という節目に先人たちの動きを学び、両校の原点へ回帰するとても意義深い活動であったと感じます。私たちも歴史に加わったのだと実感して感慨深いです。

私たちのルーツは、ここにあります。



聖学院高校
GIC宗教文化ゼミ所属
J.B.さん

歴史探訪では、まず聖学院創設に携わったガイ博士や石川角次郎などの生涯や考え方に触れ、聖学院を創設した経緯を知り、次にキリスト教精神及び建学の精神をどのように、スクールモットーに反映させていったのかを辿ったことが興味深かったです。この活動を、皆さんに共有できたことをうれしく思います。

聖学院幼稚園



お相撲さんと一緒にお餅つき

2月22日(木)、聖学院小学校の体育館を借りてお餅つきが行われました。今年も玉ノ井部屋の力士の方々が園児のために来園してくれました。園児たちは力士の大きさにびっくりしていましたが、笑顔でやさしい様子を見てすぐに慣れ、手助けをしてもらいながら、みんなで順番にお餅つきを楽しみました。「よいしょー！」という勢いの良い掛け声とともに、杵でお餅をつく友だちを、歓声を上げながら応援していました。つき上がったお餅はすぐに醤油、きなこ、あんこの3種類に味付けがされ、園児たちは自分たちでついた温かいお餅をおいしくいただきました。味付けや下準備をしてくれたのは保護者会委員、そして卒園生父母の方々です。お餅を堪能した後は、お相撲遊びの時間です。本物のお相撲さんに全力で果敢に挑む園児たち。力士の方々も全力で遊んでくれました。おいしいお餅の味とともに聖学院幼稚園の温かさを感じた一日でした。



聖学院みどり幼稚園



仲間と共に「さいたまマラソン」に参加

2月12日(月・祝)、さいたま市が主催する「さいたまマラソン」が行われました。埼玉の地で子どもの育ちを見守る幼稚園としての思いと広報活動を胸に、20名ほどの教職員、保護者の有志と共に、フルマラソンや3キロランへ参加しました。保護者の方が、この日のためにTシャツをデザインくださいました。当日は、ランナー以外にも、埼玉の街に繰り出す応援隊、TVや携帯で様子を見守る人たちなど様々でした。「さいたまマラソン」を通して一人ひとりにとって意味のあるうれしい日を、みどり幼稚園の仲間と過ごすことができた経験は、私たちの未来への大きな力となりました。



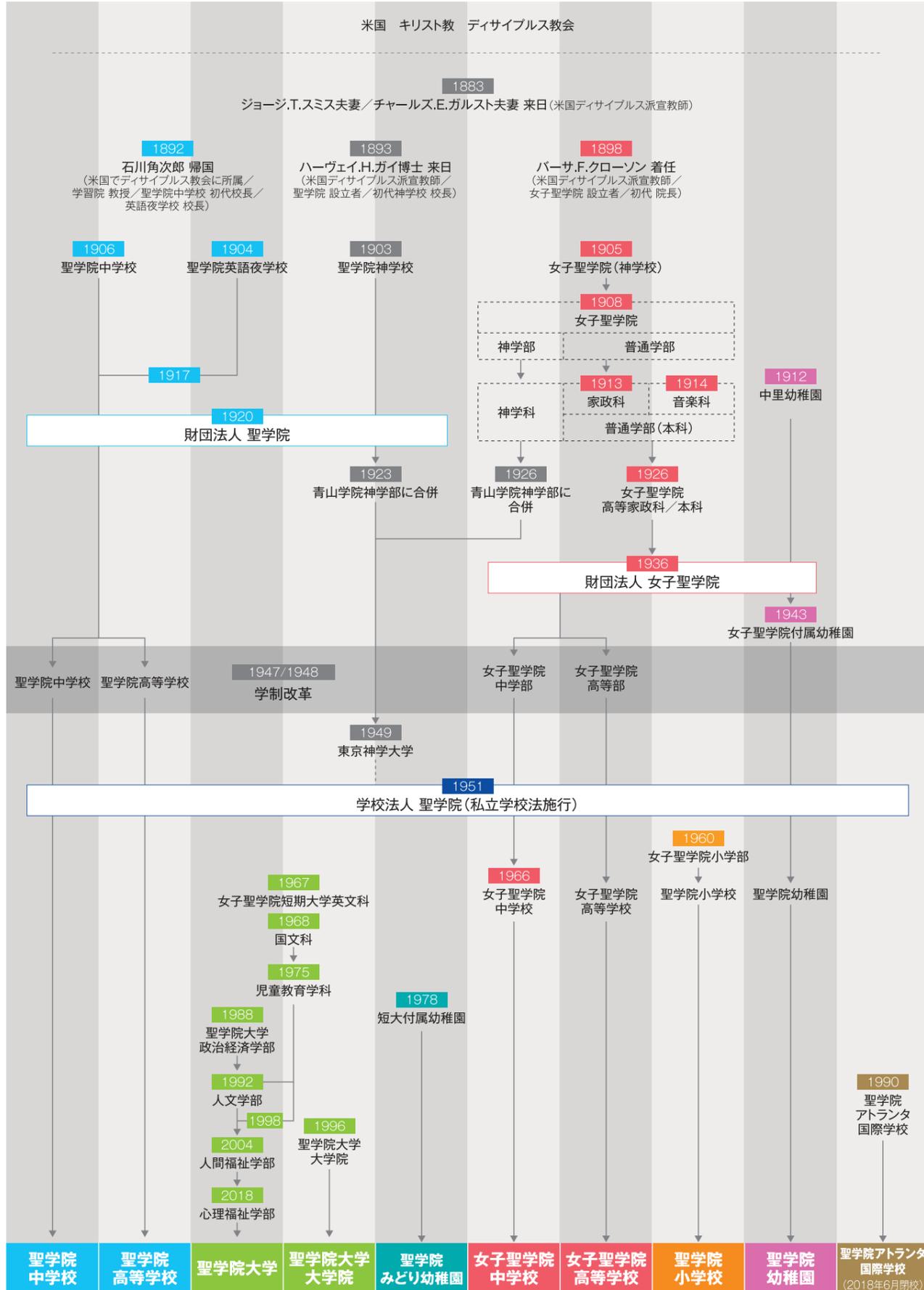
編集後記

今号は「ことば」を大切に教育活動を行う、聖学院各校の授業の実際を取り上げています。度々ご意見いただいた「教科内容の実際を見たい」という声に、少しは答えができたでしょうか。今回も雪など様々なアクシデントに見舞われながらも、何とか仕上げられました。作成に当

りご協力いただいた皆様には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。さて、この「編集後記」を書くのも3回目となりましたが、春から異動となったため、これが書き納めとなります。名残惜しいですが、新天地でも力を尽くしたいと存じます。それではいつか、またお会いしましょう。(N.K)

聖学院の歴史

History of Seigakuin University & Schools

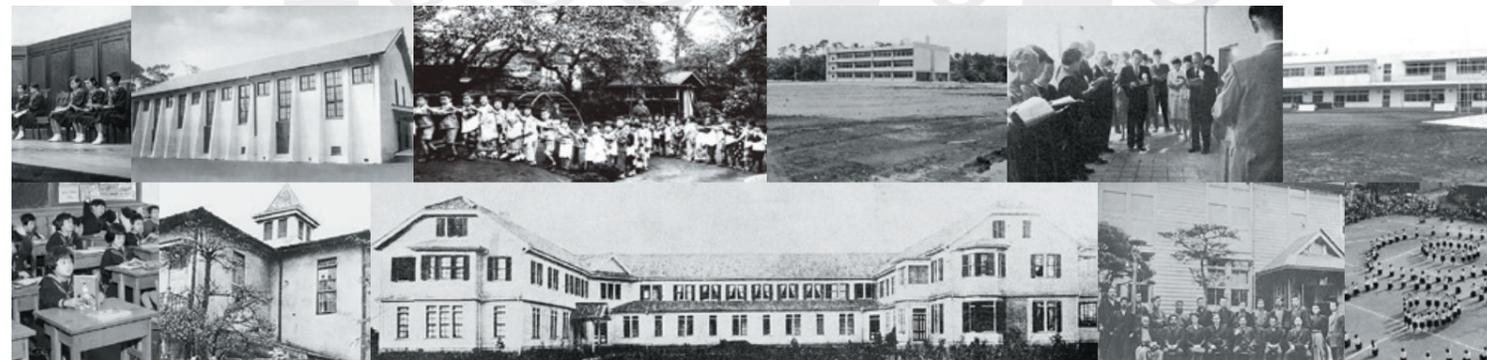


140th Anniversary of the Disciples' mission to Japan

2023年、学校法人聖学院は創立120周年

1903年、現在の文京区本郷の地に誕生した神学校から
 聖学院の歩みは始まりました
 “神を仰ぎ 人に仕う”
 この建学の精神を土台に
 真理を探究すること、神と人間を知ること、社会に貢献することを目指し
 「変えることのできるもの」と
 「変えることのできないもの」を問いながら
 聖学院はこれからも歩み続けます

1903-2023



聖学院歴史探訪

#24 聖学院教育の歴史

- 聖学院の創設と発展
女子聖学院 4-



おとめ
祈る少女の像

女子聖学院はアメリカでは長くマーガレット・K・ロング・ガールズ・スクールと呼ばれてきました。これはロバート・A・ロングという実業家の方が数回にわたって総計約10万ドルもの寄附をしてくださいましたことによります。ロング氏の母上は熱心なクリスチャンで、ロング氏は将来事業によって得た収入を必ず神の事業に寄附すると約束したのであります。ロング氏は多くのキリスト教的事業に寄附しましたが、その一つが女子聖学院であったのです。聖学院はこのような信仰深い母子によっても支えられてきたのです。

女子聖学院にまいりますと、「祈る少女の像」^{おとめ}があります。これは1961（昭和36）年に、美術部に入っていた高2の生徒たち3人の合作によるものです。「女子聖にふさわしいものを何か残したい」という願いをもってこれを製作したそうです。制服を身にまとい、胸に女子聖の校章をつけ、ひざまずいて神に祈っている少女の像で、これこそ「ミッション・スクール」の象徴と言えるでしょう。翌年の毎日新聞社主催の生徒美術作品展で最優秀賞を受け、その秋の世界祈祷週間のポスターにもこの像の写真が用いられました。失ってはならない信仰の遺産です。

（次号に続く）

出典：聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス、2006年版（出典より一部変更）



学校法人 聖学院

理事長／小池 茂子 院長／山口 博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 子ども教育学科
・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／小池 茂子 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／安藤 守 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（JCB、VISA、MasterCard、アメリカン・エクスプレス、ダイナースクラブ）での寄付が可能です。下記URL、QRコードにアクセスください。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



住所変更・広報誌の発送停止・PDF配信への変更・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）

